

副詞モッパラの意味分析

安部 朋世

千葉大学教育学部

A Semantic Analysis of 'Moppara'

ABE, Tomoyo

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿は、限定のとりたて副詞に分類されるモッパラについて、同じく限定のとりたて副詞に分類されるタダ・単ニ・ヒトエニとの比較や、限定のとりたて助詞に分類されるバカリとの比較を通して、その特徴を分析記述したものである。構文的特徴としては、従来の指摘とは異なり、モッパラ等限定のとりたて副詞とタダ・バカリ等の助詞との共起関係がとりたて副詞の特徴付けの決定的な要素ではないこと、「…モッパラとする」「…モッパラだ」といった、タダ・単ニ等にはみられない用法があることを確認した。また、モッパラの意味的特徴として〈複数性〉を有する、すなわち、〈構成要素がモッパラで示される内容に該当するかについて、おおかたが「モッパラ」で示される要素である〉ことを述べる文であることを明らかにした。さらに、ヒトエニとの違いについても指摘を行った。

キーワード：モッパラ (moppara) タダ (tada) 単ニ (tan-ni) ヒトエニ (hitoeni) バカリ (bakari)

1. はじめに

日本語におけるとりたて表現の研究は、主としてタゲやサエといったとりたて助詞を中心に分析が行われ、多くの有益な成果を上げている。一方、とりたて副詞については、管見の限りそれほど多くの研究が行われているとはいえない状況にある。本稿は、とりたて副詞の研究を進める一歩として、限定のとりたて副詞といわれるモッパラを取り上げ、同じ限定のとりたて副詞に分類されるタダ・単ニ・ヒトエニや、限定のとりたて助詞に分類されるバカリなどとの比較を行うことによって、その特徴を記述することを目的とするものである。

工藤1977では、「文中の特定の対象を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」(pp. 971-972)を「とりたて副詞」*1とし、タダ・単ニ・ヒトエニ・モッパラを「排他的限定」に分類する。「排他的限定」とは、「範列語群との対立の中で、その語句タゲと範囲を限定し、その他を排除する」(p. 972)ものと説明し、モッパラの例として次のものを挙げる。

(1) わが分隊長がモッパラ食糧を語ったのは、むろんこれが彼の最大の不安だったからであらう*2。

(工藤1977(9))

(2) どうやら彼はモッパラこの作業のため、こゝへ来てゐるらしい。

(工藤1977(10))

しかし、同じく「排他的限定」に分類するタダ・単ニ・ヒトエニとの違いについて、それほど詳細な指摘がなされているわけではない。

一方、森田1989では、モッパラについて「多くある事物の中から特定のものだけを特に対象とするさま。また、特定のものばかりが特に問題となるさま」(p. 1140)と

述べ、さらに、

(3) 現在はモッパラ英会話に時間を当てて専門の勉強は後回しにしている。(森田1989:1140)

(4) 彼はモッパラ趣味に生き、肝心の本業は適当にしているようだ。(森田1989:1140)

(5) モッパラ仕事に打ちこむばかりで、家族のことはそっちのけだ。(森田1989:1140)

(6) 彼は近々榮転するらしいとのモッパラの噂(森田1989:1140)

(7) あのレストランは本場の味以上とのモッパラの評判(森田1989:1140)

のような「モッパラ……する」「モッパラの……」の形と、

(8) 理事長の座にすわり、権力をモッパラにしている。(森田1989:1141)

(9) 関白太政大臣となり、権勢をモッパラにした。(森田1989:1141)

(10) 権力をモッパラにするばかりが能ではない。(森田1989:1141)

のような「……をモッパラにする」の形に分類し分析を行う。そして、前者は「他の事は捨ておいて、そのことばかりに」「そのことばかりの」の意味を、後者は「他の者へは回らずに、すべて特定の者だけに集中する」ことを表すと説明し、後者については、「主として権限のひとりじめ」に用いられる「文語的な表現」だとする。

この指摘によると、モッパラはバカリやタゲといった限定のとりたて助詞といわれる助詞類と類似した意味を有すると考えられるが、それらの助詞類との違いはどこにあるのか、ということが問題となる。

よって、本稿では、モッパラについて、先行研究のこれまでの知見を踏まえつつ、タダ・単ニ・ヒトエニといった副詞や、バカリ等の助詞との比較を通して、その特徴をできるだけ網羅的に指摘・記述していく。

連絡先著者：

2. モッバラとタダ・単ニ・ヒトエニ

本節では、タダ・単ニ・ヒトエニとの比較から、モッバラの特徴を分析・記述していく。

2.1. ダケ・バカリ等の助詞との共存関係

先行研究によると、単ニやタダはダケやバカリ等の助詞と共存するが、モッバラやヒトエニはそれらの助詞と共存しない例がみられることが、特徴としてあげられている(工藤1977:973)。単ニやタダについては、ダケやバカリ等の助詞と共存していない例がみられることが指摘されている(安部2004:156)が、モッバラについても、以下のようにダケ等の助詞と共存する例が指摘でき、ダケやバカリ等の助詞と共存するか否かは、これらの副詞を特徴付ける決定的な要素ではないといえよう。

- (11) 彼に関心があるのは、モッバラ砂と虫だけだったのである。(安部公房)
- (12) この寄場では十日に一度ずつ心学の講話があった。会場は役所の広間で、女の収容者たちもいっしょに出た。…(略)…女たちの中にちょっとでもみられるのがあると、進んで聞きに出る者もいるが、そんなときは講話など聞きながし、モッバラその女を眺めるだけなので、教師のほうでそういう女の出ることを拒むようであった。(山本周五郎)

2.2. モッバラ文の陳述のタイプ

工藤2000では、タダ・単ニ・モッバラ・ヒトエニを含む文の陳述のタイプは、「ほぼ叙述文専用」であるとし、タダとモッバラについては、次のように、命令や依頼の文とも共起すると述べる。

- (13) しばらくの間、モッバラ調査に従事していただきたい。(工藤2000:227)
- また、安部2004では、タダと単ニの違いとして、前者は「単純な事実報告の文」に用いられるが、後者はそのような文に用いると不自然になることを指摘している(pp.156-158)。
- (14) a そういう別途に得た食物がある間は、峻一はできるだけ体力を消耗しまいとタダじっとひたすらに寝ていた。
- b ? そういう別途に得た食物がある間は、峻一はできるだけ体力を消耗しまいと単ニじっとひたすらに寝ていた。(安部2004(26))
- (15) a 「おや、こんなところにも患者がいたのかなあ」と思いながら、私はそのドアについているNo.17という数字を、タダぼんやりと見つめた。
- b ? 「おや、こんなところにも患者がいたのかなあ」と思いながら、私はそのドアについているNo.17という数字を、単ニぼんやりと見つめた。(安部2004(28))
- モッバラについてみてみると、次のように、「単純な事実報告の文」の用例のみみられ、単ニのような制限はないといえることができる。
- (16) その酒場は、一本のカウンターと、数箇の木製の椅子からなっており、当時の酒場としても、やや古風な造作の部類に属しただろう。その店で、私たちはモッバラウイスキーのシングルを飲んだ。(五木寛之)

2.3. 「モッバラの……」「……をモッバラにする／とする」「……モッバラだ」

森田1989では、「モッバラの……」「……をモッバラにする」という形式があることを指摘し、後者には「主として権限のひとりじめに用いる」(p.1141)とするが、次のように、「……モッバラとする」の形で必ずしも権力のひとりじめを意味しない用例もみられる。

- (17) しかし、少年時代に親から引き離され、成長後も妻帯を禁じられた中での集団生活は、これらのもとキリスト教徒を、対キリスト教国との戦いをモッバラとするイスラム軍の精鋭に仕立てあげるのに成功していた。(塩野七生)
- さらに、「……モッバラだ」という用法もみられる。
- (18) 他に大阪に緒方洪庵の開いた塾があったが、ここは西洋医学というより蘭書を読むことがモッバラであったので、医学者でない福沢諭吉とか寺島宗則といった人々を生んだ。(渡部淳一)
- 「……モッバラとする」「……モッバラだ」は、モッバラによってとりたてられる部分がモッバラよりも前に位置しており、タダ・単ニ・ヒトエニにはみられない、モッバラの構文的特徴の一つに挙げられる。また、「モッバラの……」については、タダや単ニにも
- (19) これは機密書類などではない。タダのメモだ。
- (20) これは機密書類などではない。単なるメモだ。
- のような用法がみられるが、ヒトエニには見られない用法であることが指摘できる。

3. <複数性>と<おおかたが該当する>こと

モッバラは、工藤1977・2000において、タダ・単ニ・ヒトエニとともに「排他的限定」に分類されるが、次のように置き換えると不自然になったり、意味が異なる例がみられる。

- (21) a 信長自身は、つねに寺で泊まった。斎藤道三がその僧侶時代を送った妙覚寺が定宿であったが、最近はモッバラ本能寺を用いた。(司馬遼太郎)
- b ?? 信長自身は、つねに寺で泊まった。斎藤道三がその僧侶時代を送った妙覚寺が定宿であったが、最近はタダ本能寺を用いた。
- c ?? 信長自身は、つねに寺で泊まった。斎藤道三がその僧侶時代を送った妙覚寺が定宿であったが、最近は単ニ本能寺を用いた。
- d # 信長自身は、つねに寺で泊まった。斎藤道三がその僧侶時代を送った妙覚寺が定宿であったが、最近はヒトエニ本能寺を用いた。
- (21) a のモッバラをタダや単ニにかえた b・c は、文脈と合わず不自然に感じられる。また、ヒトエニにかえた d は、許容度は下がらないものの、「最近は本能寺を宿とすることが多い」といった解釈がされるモッバラ文と異なり、「最近は他の場所を宿とはせず、信長自身が積極的に(あえて)本能寺のみを宿とした」といった意味に解釈されるように思われる。

このことから、モッバラはタダ・単ニと大きく異なる点を有すること、また、ヒトエニとも異なるニュアンスを有することがわかるが、具体的にどのような点が異なる

るのだろうか。

まず、タダ・単二との違いをみてみると、(21)の例から、モッパラは〈複数性〉に関係していることが予想される。次の例は「その頃複数行われた逢瀬のおおかたは“この古巣”である」と解釈されるモッパラ文の例であるが、モッパラをタダ・単二にかえると不自然に感じられる。

(22) a 山本はそのころ、銀座三十間堀の中村家のことを、「古巣」とか中村寺とか呼んでいて、千代子との逢瀬は、モッパラこの古巣で重ねられたらしいが、副官連の中に其所まで承知している者はいなかった。
(阿川弘之)

b ??山本はそのころ、銀座三十間堀の中村家のことを、「古巣」とか中村寺とか呼んでいて、千代子との逢瀬は、タダこの古巣で重ねられたらしいが、副官連の中に其所まで承知している者はいなかった。

c ??山本はそのころ、銀座三十間堀の中村家のことを、「古巣」とか中村寺とか呼んでいて、千代子との逢瀬は、単二この古巣で重ねられたらしいが、副官連の中に其所まで承知している者はいなかった。

また、次のタダ文は、「“取りつぐ”ことのみで、仔細を説明することは必要ない」ことを述べる文であり、単二にかえても不自然にはならない*³が、モッパラにかえると許容度が下がる。

(23) a 「仔細をいえ」と、多左衛門は、たじろいだ。庄九郎の眼光が物凄かったからである。「いや、仔細は殿様に拝謁してから申しあげることしましょう。いまはタダ取りついでいただくだけでよろしゅうござる」
(司馬遼太郎)

b 「仔細をいえ」と、多左衛門は、たじろいだ。庄九郎の眼光が物凄かったからである。「いや、仔細は殿様に拝謁してから申しあげることしましょう。いまは単二取りついでいただくだけでよろしゅうござる」

c ??「仔細をいえ」と、多左衛門は、たじろいだ。庄九郎の眼光が物凄かったからである。「いや、仔細は殿様に拝謁してから申しあげることしましょう。いまはモッパラ取りついでいただくだけでよろしゅうござる」

これは、文脈からは「“取りつぐ”ことは1回のみ」と解釈されるが、モッパラにかえると「“取りつぐ”こと」が複数回あるように解釈され、文脈と齟齬を来すためだと考えられる。

モッパラ文が、〈複数性〉を有する、すなわち、〈構成要素がモッパラで示される内容に該当するかについて、おおかたが該当したことを述べる〉文であるということは、次の例からも支持される。次のモッパラ文の例は、「劇団の構成メンバー」が「大多数が子どもである」ことを述べる文であるが、モッパラをタダ・単二にかえると、「劇団の構成メンバーの性格は子どもっぽい」というように、「メンバーの構成」を述べる文ではなく、「メンバーの性格」を述べる文に解釈されるように思われ、モッパラ文の解釈とは異なってしまふ。

(24) a 劇団のメンバーは、モッパラ子どもでもある。

b # 劇団のメンバーは、タダ子どもでもある。

c # 劇団のメンバーは、単二子どもでもある。

また、「鉱物の成分の大体が鉄である」ことを述べる文であるモッパラ文をタダ文・単二文にかえると、不自然に感じられたり、単二文のように、「成分は鉄であるが、それはたいしたことではない」といった意味に解釈される。

(25) a この鉱物の成分は、モッパラ鉄である。

b ??この鉱物の成分は、タダ鉄である。

c # この鉱物の成分は、単二鉄である。

さらに、次の例は、複数の中から一つに限定する文であるが、その場合、モッパラ文の許容度が下がることが確認される。

(26) a ??1年生の中からこの委員会に出席しているのはモッパラ太郎だ。責任重大だ。

a 1年生の中からこの委員会に出席しているのは太郎ダケだ。責任重大だ。

これらのことから、モッパラは〈複数性〉を有する、すなわち、〈構成要素がモッパラで示される内容に該当するかについて、おおかたが「モッパラ」で示される要素である〉ことを述べる文であるということが出来る。

4. モッパラとヒトエニとの比較

では、ヒトエニとの違いはどのような点であろうか。

ヒトエニについては、採集した例文に関していえば、13例中12例が「ひとえに～を願う」「ひとえに～のおかげ／のため／のせい」という例文であった。

(27) お勝はその大きな眼でじっと源太を見つめ、やがて頭をさげ、ヒトエニおすがり申します、と、ややかすれた、意外にふとい声でいった。(司馬遼太郎)

(28) 更にいえば、須磨明石へのさすらいの旅も、ヒトエニちい姫をもうけるがための神の摂理であったのかもしれぬ。(田辺聖子)

(29) 弥生はまた、昭和十一年五月、東京上野精養軒で日本女医公認五十周年祭が行われたが、その前日、「女医誕生五十年に際して」と題してラジオ放送をし、そのなかで「いまわが国における女医数、三千四百人に達したことを同性のために誇りながら、これもヒトエニ荻野吟子女史の創造者としての努力があったからに他なりません」と述べている。(渡辺淳一)

また、上記のヒトエニ文をモッパラにかえると、相手への願いを表す(27)や、対象である人物の功績を讃える文である(29)では、(30)(32)のように不自然に感じられ、また、旅の理由を述べる文である(28)では、「それ以外の理由は考えられない」といったニュアンスが、モッパラにかえた(31)では感じられず、「理由のおおかた(主たる理由)は“ちい姫をもうけるため”である」といった、客観的なニュアンスにかわってしまうように思われる。

(30) ??お勝はその大きな眼でじっと源太を見つめ、やがて頭をさげ、モッパラおすがり申します、と、ややかすれた、意外にふとい声でいった。

(31) # 更にいえば、須磨明石へのさすらいの旅も、モッパラちい姫をもうけるがための神の摂理であったのかもしれぬ。

(32) ??弥生はまた、昭和十一年五月、東京上野精養軒で日本女医公認五十周年祭が行われたが、その前日、「女

医誕生五十年に際して」と題してラジオ放送をし、そのなかで「いまわが国における女医数、三千四百人に達したことを同性のために誇りながら、これもモッパラ萩野吟子女史の創造者としての努力があったからに他なりません」と述べている。

これらのことから、ヒトエニは、モッパラと異なり、発話者の主観的な価値付けを伴うものであることが予想される。

このことは、次の例からも支持される。「鉱物の構成要素を調べると、そのおおかた・おおよそが“鉄”である」という客観的な事柄を述べる文である(33)をヒトエニにかえると、不自然な文になるのである。

(33) a この鉱物の成分は、モッパラ鉄である。
(25の再掲)

b ??この鉱物の成分は、ヒトエニ鉄である。

一方、「劇団のメンバーを調べると、構成員はおおかた・おおよそが子どもである」ことを述べる(34)では、ヒトエニにかえると、「メンバーの性格は“子ども”である(他に言いようがない)」というように、異なる意味に感じられる*4。

(34) a 劇団のメンバーは、モッパラ子どもである。
(24 a の再掲)

b #劇団のメンバーは、ヒトエニ子どもである。

(33)と(34)のヒトエニ文の違いは、(33)の「鉱物の成分は鉄だ」という文では、「鉱物の成分」といった客観的な事柄以外の解釈が困難であるのに対し、(34)の「メンバーは子どもだ」という文では、「メンバーは子どもで構成されている」という「構成員」を問題とする解釈と、「メンバーは子どもっぽい」という「性格」を問題とする解釈が可能であることによると考えられる。すなわち、客観的な事柄である「鉱物の成分」以外の解釈が困難である(33)は、発話者の主観的な価値付けを伴うヒトエニと意味的に齟齬を来すために不自然になるのに対して、発話者の主観的な判断を伴い得る「性格」を問題とする解釈を許容する(34)では、発話者の主観的な価値付けというヒトエニの意味で解釈することが可能となると考えられよう。

5. モッパラとバカリ

本節では、モッパラとバカリとの違いについて分析する。

森田1989は、モッパラについて「多くある事物の中から特定のものだけを特に対象とするさま。また、特定のものばかりが特に問題となるさま」(p. 1140)と、ダケやバカリを用いて説明するが、同じく「限定」の意味を有するとされるバカリやダケとの相違点が問題となる。その中で、バカリについては、先行研究において、「該当するかどうかを調べるとバカリで示される要素が多く確認される」といった意味があることが述べられている。例えば、菊地1983では、「〈同類として括れる事態が数多くみとめられる〉時に使われる」と述べ、安部2001では、「〈ある前提にあてはまる要素が、ある基準上の如何なる角度から判断しても、バカリによって示される当該要素である〉ことを、発話者が確認したことを表明する」

ものであるとする。また、定延2001では、「探索」という概念を用いて説明している。

このようなバカリの特徴は、3. 節でモッパラ文について指摘した、「〈複数性〉を有する、すなわち、〈構成要素がモッパラで示される内容に該当するかについて、おおかたが「モッパラ」で示される要素である〉ことを述べる」文である、ということと類似していると考えられる。では、バカリとモッパラは、どのような違いがみられるのだろうか。

結論を先に述べると、モッパラとバカリの違いは、〈マイナスのニュアンスを伴うか否か〉であると考えられる。

次の(35)は「メンバーの構成員」について述べる文であり、(36)は「鉱物の成分」について述べる文であるが、バカリ文にかえると、モッパラ文に比べて「メンバーの大半が子どもで困る」「成分の大半が鉄で困る」といったマイナスのニュアンスが感じられる。

(35) a 劇団のメンバーは、モッパラ子どもである。
(24 a の再掲)

b #劇団のメンバーは、子どもバカリである。

(36) a この鉱物の成分は、モッパラ鉄である。
(25の再掲)

b #この鉱物の成分は、鉄バカリである。

また、次の例は、モッパラをバカリにかえると、許容度が下がるが、これは、(37)が「砂の特性」という客観的な事柄を述べる文脈であることから、バカリの有する〈マイナスのニュアンス〉と齟齬を来たし許容度が下がるものと考えられよう。

(37) a 土の結合力が弱ければ、石はもちろん、粘土でさえ飛ばないような微風によっても、砂はいったん空中に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられるというわけだ。どうやら、砂の特性は、モッパラ流体力学に属する問題らしかった。(安部公房)

b ??土の結合力が弱ければ、石はもちろん、粘土でさえ飛ばないような微風によっても、砂はいったん空中に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられるというわけだ。どうやら、砂の特性は、流体力学にバカリ属する問題らしかった。

以上のことから、バカリとモッパラの違いは、前者が〈マイナスのニュアンス〉を伴うのに対して、後者はそのようなニュアンスを伴わないことが挙げられる。

6. おわりに

本稿では、「限定」のとりたて副詞に分類されるモッパラの特徴について、先行研究の知見を踏まえながら、同じく「限定」のとりたて副詞に分類されるタダ・単・ヒトエニとの比較や、「限定」のとりたて副詞に分類されるバカリとの比較を通して、分析・記述を行った。本稿の考察の結果、限定のとりたて表現について考察を進めるためのいくつかの知見を示すことができたと考える。

これらの特徴が、他のとりたて副詞やとりたて助詞とどのような関係にあるのか、他のとりたて表現との比較等、今回明らかにできなかった問題については、今後の

課題となる。

『金閣寺』, 山本周五郎『さぶ』, 渡辺淳一『花埋み』

【注】

- * 1 工藤1977ではこの副詞を「限定副詞」と呼ぶが、工藤1982で「とりたて副詞」としており、工藤2000でも同様の「とりたて副詞」の名称を用いていることから、統一して「とりたて副詞」と呼ぶことにする。
- * 2 以下、引用する例文は、モッバラ等の副詞やバカリ等の助詞の部分に片仮名にかえ、傍線等を適宜付けたり削除したりしている。また、例文の許容度を*、??、?で示す。#は、不自然な文ではないが、比較する文の意味と異なる解釈になることを示している。
- * 3 ただし、タダと単二ではニュアンスが異なる。タダと単二の違いについては、安部2004を参照されたい。
- * 4 (34) bは、「劇団のメンバーは、子どもがよい」「劇団のメンバーは子どもであるべきだ」という解釈も可能であるように思われる。このような、発話者の願望や価値判断を表す解釈が可能であることから、ヒトエニが〈発話者の主観的な価値付け〉を伴うものであることが支持されよう。

【用例出典】

用例は全て『CD-ROM版新潮文庫の百冊』（新潮社）から採集したものである。以下に作品名及び著者名を挙げる。

安部公房『砂の女』, 五木寛之『風に吹かれて』, 塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』, 司馬遼太郎『国盗り物語』, 田辺聖子『新源氏物語』, 三島由紀夫

【参考文献】

- 安部朋世2001「バカリによる「限定」」『和光大学表現学部紀要1』, pp. 135-144
- 安部朋世2003「とりたて性からみたタダ」『鶴林紫苑 鶴見大学短期大学部国文科創立五十周年記念論集』 風間書房, 左pp. 59-74
- 安部朋世2004「単二とタダ」『千葉大学教育学部研究紀要』52, pp. 155-160
- 菊地康人1983「バカリ・ダケ」国広哲弥編『意味分析』 東京大学文学部言語学研究室, pp. 57-59
- 工藤浩1977「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』 明治書院, pp. 969-986
- 工藤浩1982「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』 国立国語研究所, pp. 45-92
- 工藤浩2000「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』 岩波書店, pp. 163-234
- 定延利之2001「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1-1, 日本語文法学会, pp. 111-136
- 森田良行1989『基礎日本語辞典』 角川書店

【付 記】

本稿は、平成18年度科学研究費補助金・若手研究(B)「日本語における「とりたて」の体系化に関する記述的研究」による研究成果の一部である。